

## プログラム・ノート

解説=飯尾洋一



### 本日の公演について

記念すべき第1回の「渋谷の午後のコンサート」のテーマは「新たな時代に向かって」。音楽の歴史に新たな1ページを刻んだ作曲家たちの代表作がずらりと並びました。いずれもコンサートではもちろんのこと、テレビCMや映画などでもたびたび使用される人気曲ばかり。オーケストラを聴く醍醐味がぎっしりとつまっています。

オーケストラからはさまざまなサウンドが生まれてきます。賑やかなパーティを思わせる華やかな音、透明感あふれる爽やかな音、苦悩しているかのような重厚な音。楽曲のキャラクターに応じて、それにふさわしいサウンドを作り上げることができるのがオーケストラの魅力。本日は東京フィルと長年にわたって共演を重ねる名指揮者、尾高忠明が指揮台にのぼります。精彩に富んだサウンドを披露してくれることでしょう。

### スッペ：喜歌劇『軽騎兵』序曲

ウィーン流オペレッタの粹

Franz von Suppé  
1819-1895



フランツ・フォン・スッペ（1819-1895）は今年生誕200年を迎えたオーストリアの作曲家。ウィーンで最初に成功したオペレッタ（喜歌劇。オペラよりも大衆的でコミカルな内容をもつ）の作曲家として知られています。軽妙なメロディと生き生きとしたリズムに加えて、ウィーン特有の優美さを兼ね備えているのが特徴です。

膨大な数のオペレッタを書いたスッペですが、作品の多くは忘れ去られてしまいました。喜歌劇『軽騎兵』も本編は失われてしまい、どんな作品だったのかは想像するほかありません。しかし、幸いなことに序曲だけは残っており、現在も広く親しまれています。冒頭の勇壮なトランペットのテーマはオープニングの音楽にぴったり。やがて馬の駆け足のような行進曲があらわれ、戦いの場面を連想させます。続いて登場するのは弦楽器による憂いを帯びたメロディ。これは兵士の報われない恋を描いているのでしょうか。ふたたび行進曲が帰って来て、冒頭のトランペットのテーマを交えながら、元気いっぱい曲を閉じます。



## レハール:ワルツ『金と銀』

ゴージャスな舞踏会を彩るワルツ

*Franz Lehár*  
1870-1948



スッペに続いてウィーンのアペレッタ界で旋風を巻き起こした作曲家がフランツ・レハール(1870-1948)です。代表作『メリー・ウィドー』はアペレッタ史上最大のヒット作ともいわれるほどの人気を獲得しました。レハールのアペレッタにはよくワルツが登場しますが、この『金と銀』はアペレッタのためではなく、独立した作品として書かれたワルツです。

父親の仕事の継いで軍楽隊長を務めていたレハールでしたが、このワルツ『金と銀』をはじめとするワルツや行進曲で評判を呼ぶと、軍隊を辞めて、アペレッタ作曲家へと転身することになりました。

『金と銀』というタイトルはいろいろな想像力をかきたてます。金メダルと銀メダル、金の斧と銀の斧、金閣と銀閣……。実はこのワルツが踊られた舞踏会場が金と銀で装飾され、来場者も金と銀の装飾を身につけていたから、このタイトルが付けられたのだとか。なんともゴージャスですね。

## リスト:レ・プレリュード

音楽で表現した人生観

*Franz Liszt*  
1811-1886



フランツ・リスト(1811-1886)が作曲した交響詩の代表作が、この「レ・プレリュード」(前奏曲)。交響詩とは交響的な詩、つまりオーケストラによる詩とでも考えればいでしょう。交響曲と違って、ストーリー性があることが一般的です。リストは交響詩の創始者として知られています。

では、この曲でリストが描こうとしたストーリーは? リストはこの曲にフランスの詩人ラルマーティエヌの詩「レ・プレリュード」の要約を標題として添えました。すなわち、「人生とは死への前奏曲(プレリュード)。愛は嵐によってさえぎられる。傷ついた人は静かな田園で自らをいたわる。しかし、やがてトランペットが警報を発すると、人は戦いへと向かう」。少々観念的ですが、これがリストの人生観なのでしょうか。全体は「緩・急・緩・急」の4つの部分からなり、各部分が人生のはじまり、嵐、田園の安らぎ、戦いに対応します。

トランペット、シンバルや大太鼓、ハープなども加わって、オーケストレーションは賑やか。山あり谷ありの人生のドラマが力強く描かれます。

## シベリウス：交響詩『フィンランディア』

圧政と戦う祖国を讃えて

Jean Sibelius  
1865-1957



フィンランドの作曲家ジャン・シベリウス（1865-1957）の出世作となったのが交響詩『フィンランディア』。作曲は1900年、ヘルシンキにて。当時、フィンランドはロシア帝国の支配下にありました。シベリウスは、帝国の理不尽な圧政に対抗する祖国フィンランドの輝かしい未来を描いた舞台劇「フィンランドは目覚める」のための音楽を作曲します。この劇音楽から生まれた楽曲が『フィンランディア』。舞台劇の内容に即した愛国的な楽想は、聴衆に熱狂を呼び起こしました。あまりに反響が大きかったため、フィンランド人の愛国心が高まることを恐れたロシア当局がこの曲を演奏禁止処分にしたほど。しかし、曲はヨーロッパ各地で演奏されるようになり、シベリウスの名は一躍国際的に知られることとなりました。フィンランドの新時代を象徴するような曲といってもいいでしょう。

冒頭の重々しい金管楽器の咆哮が表すのはフィンランド人たちの叫びでしょうか。やがて勇ましい戦いのファンファーレが響きます。高揚感あふれる輝かしいテーマに続いて、ゆったりとした賛歌へ。最後にやってくるのは祖国の勝利です。

## ラヴェル：ボレロ

反復の美学

Maurice Ravel  
1875-1937



ボレロとはスペイン舞曲の一種のこと。スペイン国境近くのバスク地方に生まれ、生後すぐにパリに移ったモーリス・ラヴェル（1875-1937）は、たびたび作品を通してスペイン文化への愛着を表明してきました。

この曲は特殊なアイディアに基づいて書かれています。使うリズムはたった一種類だけ。冒頭から小太鼓が延々とボレロのリズムを刻み続けます。このリズムに乗って、同じメロディがなんどもなんども繰り返されます。といっても、メロディを奏でる楽器は同じではありません。最初はフルートで、次はクラリネットで、その次はファゴットで、さらには異なる楽器の組合せで。同じメロディを次々と違った音色で奏でるところにラヴェルの創意があります。やがて弦楽合奏も加わって、音楽はどんどん力強さを増していきます。そして頂点に達したと思ったら、突然、滝が流れ落ちるかのように曲が閉じられます。

作曲者本人はこの曲がヒットするとは思っていなかったそうですが、曲は大成功を収め、ラヴェル屈指の人気作となりました。

いいお・よういち（音楽ジャーナリスト）／著書に『クラシック音楽のトリセツ』（SB新書）、『R40のクラシック』（廣済堂新書）、『マンガで教養 やさしいクラシック』監修（朝日新聞出版）他。雑誌やウェブ、コンサート・プログラム等に幅広く執筆する。テレビ朝日「題名のない音楽会」他、放送でも活動。